



### 外郎売の台詞

拙者親方と申すは、お立ち合いの内に御存知のお方もござりましようが、お江戸を發つて二十里上方、相州小田原、一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへお出でなさるれば、欄干橋虎屋藤右衛門、只今は剃髮致して、円齋と名乗ります。元朝より大晦日まで、御手に入れます此の菓は、昔、ちんの国の唐人、外郎という人、わが朝へ来たり、帝へ参内の折から、此の菓を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ、冠の隙間より取り出す。依つて其の名を帝より、透頂香と賜る。即ち文字には、頂、透く、香と書いて、とうちんこうと申す。只今は此の菓、殊の外世上に弘まり、方々に似看板を出し、イヤ小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと、色々に申せども、平仮名を以てういろうと致したは、親方円齋ばかり。若しやお立合の内に、熱海か塔の沢へ湯治にお出なさるか、又は伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされますな。お登りならば右の方、

《このページの原典》

『花江都歌舞妓年代記（はなのえど かぶきねんだいき）』  
巻之一・初編二 烏亭焉馬 著、松高齋春亭 画  
天保12年・1841年刊（国立国会図書館所蔵）

お下りなれば左側、八方が八棟、表が三つ棟玉堂造、破風には菊に桐の臺の御紋を御赦免あつて、系図正しき薬で御座る。イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、御存知ない方には、正身の胡椒の丸呑、白川夜船。さらば一粒食べかけて、その気味合をお目に懸けましょう。先ず此の薬を、かように一粒舌の上へ乗せまして、腹内へ納ますると、イヤどうもいえぬは、胃肝肺肝が健やかに成つて、薫風咽より来り、口中微涼を生ずるが如し。魚、鳥、木の子、麵類の食い合わせ、其の外、万病速効あること神の如し。扱、此の薬、第一の奇妙には、舌の廻ることが銭独樂が裸足で逃る。ひよつと舌が廻り出すと、矢も楯も堪らぬじゃ。そりやそりやそりや、そりやそりや、廻つて来たわ、廻つて来るわ。アワヤ咽、サタラナ舌に、カ牙サ歯音。ハマの二つは唇の軽重開口爽かに、あかさたな、はまやらわ。おこそその、ほもよろを。一つぺぎへぎに、へぎほし、はじめ。盆豆、盆米、盆牛蒡。摘蓼、摘豆、摘山椒。書写山の社僧正。小米の生嚙、小米の生嚙、こん小米のこ生嚙。繻子緋繻子、繻子繻珍。親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親嘉兵衛子嘉兵衛、子嘉兵衛親嘉兵衛。古栗の木の古切口。雨合羽が番合羽か。貴様の脚絆も皮脚絆、我等が脚絆も皮脚絆。尻皮袴のしつ綻びを、みはりなりなが三針針長にちよと縫て、縫てちよとぶん出せ。河原撫子野石竹。野良如来野良如来、三野良如来に六野良如来。一寸のお小仏にお蹴躓きやるな。細溝に泥鱸によるり。京の生鱈、奈良、生学鯉、ちよと四五貫目。お茶立ちよ、茶立ちよ、ちやつと立ちよ、茶立ちよ。青竹茶筌でお茶ちよと立ちよ。来るわ来るわ何が来る、高野の山のおこけら小僧、狸百足、箸百膳、天目百杯、棒八本。武器馬具、武器馬具、三武器馬具、合わせて武器馬具六武器馬具。菊栗、菊栗、三菊栗、合わせて菊栗六菊栗。麦ごみ、麦ごみ、三麦ごみ、合わせて麦ごみ六麦ごみ。あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。向うの胡麻殻は荏の胡麻殻か真胡麻殻か、あれこそ

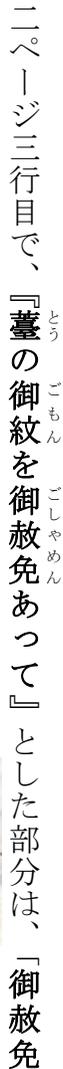
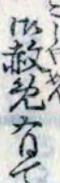
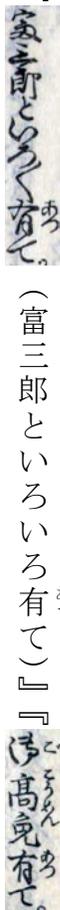
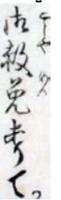
本の真胡麻殻。がらびいがらびい風車。おきやがれ小法師、おきやがれ小法師。  
昨夜もこぼして、又こぼした。たあふぼぼ、たあふぼぼ、ちりから、ちりから、  
つたつたつぽ。たばたば、干蛸落たら煮て食を。煮ても焼いても食われぬ物は、五徳、  
鉄弓、金熊童子に、石熊、石持、虎熊、虎鱈。中にも東寺の羅生門には、茨木  
童子が、うで栗五合、搦んでおむしやる。かの頼光の膝元去らず。鮎、金柑、椎茸、  
定めて後段な、蕎麦切り、素麺、鯉鮓か、愚鈍な、小新発知。小棚のこ下に、小桶  
にこ味噌がこ有るぞ。こ杓子こ持つて、こ掬てこ寄せ。おっと合点だ、心得たん  
ぼの、川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚は走って行けば、灸を擦りむく、三里ばか  
りか、藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして、早天そうそう、  
相州小田原透頂香。隠れござらぬ、貴賤群衆の花のお江戸の花ういろう。あれ、  
あの花を見て、お心をお和らぎやつという。産子、這子に至るまで、此のうい  
ろうの御評判、御存知ないとは申されまいつぶり、角出せ、棒出せ、ぼうぼ  
う眉に、臼、杵、搗鉢、ばちばち、ぐわらぐわらぐわら（がらがら）と、羽目  
を外して今日御出の、何も様に、上ねば成らぬ、売ねば成らぬと、息せい引つ  
ぱり、東方世界の薬の元締め、薬師如来も上覧あれと、  
ホホ敬つて、ういろうはいらっしやりませぬか。

《参考》 一ページの表記についての解釈など

- 一ページ本文六行目で、『用ゆる時は』と表記した部分は、「用ゆる時々」とする資料も見られます。『花江都歌舞妓年代記』（以下、『年代記』）で使われている文字は『』で、踊り字の『々（同の字点）』が使われているようにも見えますが、これは、変体仮名で「は」に使われる文字の一つの、「」の形ではないかと思われます。『年代記』では、「何々は」の場合、『』（または伊勢…）などと「八」の文字が多用されていますが、『』（この君は今）のように、「盤」の字を崩した「」に似た字も使われおり、また、一文字の繰り返しには「々（同の字点）」ではなく、『』（人々これを）のように「」（二の字点）が多いようにも見受けられるため、ここでは、『』は、『用ゆる時は』としました。

- 一ページ本文六行目の『冠』の読みは、「かんむり」とする資料が見られますが、ここでは「かぶり」としました。「冠」は、「かがぶり」「かがほり」「こうぶり」「かむり」「かぶり」などともされ、『年代記』では『』（かぶりのすきま）と、振り仮名が「かぶり」となっていることから、ここでは『かぶり』としました。「かむり」とする資料も見られます。

- 一ページ本文七行目の『透頂香』は、『年代記』では『頂透香』と表記されていますが、正しい表記の『透頂香』としました。『頂透香』は著者烏亭さんの誤記ではないかと思われます。説明の部分は、『透頂香』と書く、返り点での読み方と捉え、『頂透香』のままとしましたが、烏亭さんの誤記と思われる書き方からすれば、『透く、頂、香』とも考えられます。

- 二ページ三行目で、『』とした部分は、「御赦免ありて」とする資料も見られますが、『年代記』では『』となっていて、『有』に振り仮名が振られています。従って、『有て』を『ありて』と取るか、『あつて』と取るかの違いかと思われませんが、全九巻からなる『年代記』では、「有て」と振り仮名を振った部分は一か所のみで、「有て」とした部分は、『』（富三郎とあつて）『』（富高免有て）（御高免有て）など少なくとも四か所ありました。その四か所の中でも、『御赦免有て』に近い表現として『御高免有て』があることなどから、ここでは『御赦免あつて』としたものです。なお、『外郎売』の初演からおよそ百年後に書かれた、十返舎一九の『続膝栗毛』に登場する「ういろうり」の口上では、『』と、『ありて』となっています。

● 二ページ十行目で、『サタラナ舌したに』とした部分は、『舌せつ』とする資料も見られますが、『年代記』では振り仮名が振られていません。これは『五音ごいん』と言われる発声を表すもので、前後に「咽のど・牙げ・齒し・唇くちびる」と出て来ます。『年代記』での『五音』の読み方は音訓が混在しているため、『舌』は、『した』『ぜつ』のどちらも考えられますが、ここでは、『年代記』に出来るだけ近い年代の文献を引くこととし、明治十六年・1883年刊の『市川團十郎お家狂言』により『舌した』としました。なお、「サタラナ」など、片仮名とした部分は、『年代記』では平仮名ですが分かりやすくするために表記を変えました。

● 二ページ十二行目の『軽重』の読みは、「けいちよう」とする資料が見られ、現代ではそのように読むのが一般的ですが、「きようじゅう」や「けいじゅう」とも読まれ、『年代記』では『唇くちびるの軽かろき』と、「くちびるのきやうじう」と振り仮名が振られていることから、ここでは『きようじゅう』としました。

● 二ページ十三行目で、『一ッへぎへぎにへぎほしはじかみ』とした部分は、「一ッへぎへぎにへぎほし」などとする資料も見られますが、『年代記』での表記は『』で、変体仮名で「ペ」として使われる「」などの字に近い文字が見られるため、ここでは、『一ッへぎ』としました。『年代記』では、数を数える場合「一ッ・二ッ」など、「ッ」の字が使われ、ここも「一ッ」と捉えることも出来ますが、続く字が「ペ」となっているため『一ッへぎ』としたものです。『年代記』では他に、「一ッたい（いっぱい）」なども見られます。ちなみに「た」は、「者」という字を崩した「は」と読む変体仮名で、『へぎ』の次ぎに来る『よ』は、「尔」という字を崩した「に」と読む変体仮名です。

● 三ページ二行目から三行目にかけての「菊栗」と「麦むぎごみ」のくぐりには、『年代記』では、「菊栗菊栗三菊栗 合せて 麦むぎごみ六麦むぎごみ」となっていて、菊栗の「六」と、麦むぎごみの「三」が欠落した形となっているため、「菊栗 菊栗 六菊栗」や「麦むぎごみ 麦むぎごみ 三麦むぎごみ」などを加えて形を整えました。

● 三ページ七行目で、『ちりから ちりから つったつぽ』とした部分は、「すったつぽ」とする資料も見られますが、『年代記』では『』となっていて、『』という字は「徒」という字を崩した「つ」と読む変体仮名であるため、ここでは『つったつぽ』としました。ちなみに「」は「多」という字を崩した「た」と読む変体仮名で、『』は「保」という字を崩した「ほ」と読む変体仮名です。

● 三ページ九行目で、『干蛸』とした部分は、「一丁蛸」とする資料も見られますが、『年代記』では『なぢくたご』となっています。これを「一丁」と読めないこともありませんが、「欄干橋屋藤右衛門」の下りに出てくる「欄干」の「干」の字が『欄干橋』と書かれていて、「なぢくたご」と同じ表記であることから、ここでは『干蛸』としました。

平成二十一年・2009年の、国立劇場十一月歌舞伎公演での台本では、「タツポタツポ干蛸 落ちたら煮て食うを」となっていて、十二代目團十郎は「タツポタツポ いっひだこ おちたらにてくうを」と演じました。

● 三ページ十三行目で、『たんぼ』とした部分は、『年代記』では「たんぼ」（たんぼ）としています。これは「田圃」のことと思われ、ここでは、現代の一般的な読み方の『たんぼ』としました。「づ」は、「本」の字を崩して「ほ」と読む変体仮名に半濁点を付けた文字です。

● 三ページ目、後ろから六行目の、『お心をお和らぎやっ』とした部分は、「おやわらぎや」「おやわらぎやい」などとする資料も見られますが、『年代記』での表記は『おやわらぎや』で、「や」は「也」という字を崩した「や」と読む変体仮名、「心」は「川（州）」という字を崩して「つ」と読む変体仮名です。従って、ここでは『お和らぎやっ』と表記しました。発音としては『お和らぎやあ』が近いかと思われます。この音は、続く「産子、這う子」にも掛かる「おぎやあ」という赤ん坊の泣き声とも捉えることも出来るかと思えます。

平成二十一年十一月公演での十二代目團十郎は、『お心をお和らぎやアという』と演じました。

● 『産子這子』の『這子』は、『年代記』では旧仮名で『はふこ』としているため『ほうこ』としました。「這子人形」という言葉があります。

#### 〔知識〕

三ページ目、後ろから五行目の、『産子這子に 至るまで』のくだりを、平成二十一年十一月公演での團十郎は、『産子這子に 玉子まで』と、三つの言葉を「子」で韻を踏み演じました。

これは、昭和五十五年・1980年歌舞伎座初演の野口達二台本によるものです。

2016年（平成28年）2月  
2008年版改訂  
みんなの知識 ちよっと便利帳